突然の別れ

国立病院機構本部
総合研究センター長
難波吉雄

いつものように過ぎていた残暑のあの日，いただいた葉書から，一首の短歌が脳髄に飛び込んできました．それは，恩師が急逝されたことを告げるものだったのです．

思い起こせば36年前，私がまだ学生だった頃，アルツハイマー病の研究を志し，東京大学脳研究施設脳病理学部門の門をたたいた時からご縁が始まりました．その後，大学院生として再会し，研究の進め方，実験の直接の指導，論文の書き方などの学問的な方面は言うに及ばず，人間としての生き方などについても大いにご示唆いただきました．お酒もたしなまれ，ご一緒させていただくと，前向きになるようなお話を伺うことができ，心新たに諸事に向かうことができる，大変楽しいお酒でした．

まさに司馬遼太郎の小説「翔ぶが如く」に西郷隆盛と行動を共にした増田宗太郎の言葉，「一日先生に接すれば一日の愛生ず，三日接すれば三日の愛生ず」を地で行くような先生であったと思います．

最初にお目にかかった赤煉瓦の研究棟，今では研究棟ではなく事務棟にかわってしまったようですが，そこにたたずんでいると，あの時の先生とのやり取りが，風に乗って耳を通り過ぎてゆくようです．

「暗く成れば，星が見える」（アメリカの歴史家であるチャールズ・ビアード）といいます．葉書でいただいた先生の短歌を胸に私は日々進んでいきます．

山峡はしずかなる舟　夜もすがら
星のめぐりを漕ぎすすむなり
（歌集 「しずかなる舟」より）